# 他人事

他人事

# 一

「それ。はりきって行ってこい」
どんと背中を押され、エドワードはよろめくように前へ出た。
歓楽街のど真ん中、きらきらと輝くネオンサインが心許無い自分自身を照らしている。
飲み仲間は大学で一緒のゼミをとっている人間だった。ふざけた企画ばかり思いつく、そんな彼らにまんまとしてやられ、本日の罰ゲーム担当になってしまったのだが。

彼のトレードマークとも言える、長く伸びた淡色の金髪は、今日もいつも通り適当に後ろでくくられている。柔らかく細い直毛のブロンドをそのまま垂らしていると、不本意なことに幾度となく女性と間違われ、同性にナンパされてしまうからだ。
その髪と同色の双眸もまた、エドワードという青年の外見的印象を随分際立たせていた。日差しが透けるような虹彩を持つ、ややつり上がりぎみの瞳はアーモンドの実のように形良い。シミひとつない肌の滑らかさはこれまた女性のものと比べてもなんら遜色なかった。薄く色づいた唇から出てくる言葉遣いが乱暴でさえなければ、新人俳優かモデルばりの容姿と表現しても過言ではない。
一般的な男性と比べると若干身長が低いのだけが弱点といえたが、それ以外では、エドワードはパーフェクトな人生を歩んでいた。

優しい母とお人よしな父、姉代わりに育った幼馴染の少女とその祖母に囲まれ、何一つ不自由のない生活を楽しんでいたエドワード。
しかし今夜は、そんな彼にとってはじめての試練の夜となりそうだ。
ゼミのメンバーは、エンヴィー、ラッセル&フレッチャー兄弟、ラスト、クララ、ケイン、セリム、これにエドワードが加わって八人。本日は、実はフレッチャーとセリムが新入生としてメンバーに加わった祝いで集まったはずだったが、酒盛りが進むうち、趣旨は妙な方向へ向かっていた。メンバーが増えた記念に、いつもと違った遊びをやらないかと言い始めたのがそもそも誰だったのか覚えていない。ただなんとなく決められたことは、最後までこの遊びを抜け出すことは許されないという非情な掟だけだった。
途中、誰が罰ゲームをしなければならないか、それを決めるために三度の賭けが行われた。結果、エドワードが敗者に決定し、もう、にっちもさっちも行かない状況にされてしまったのだった。罰ゲームを考えついたのはエンヴィーだ。だから多分、言い出したのもこいつだったのではと、内心エドワードは歯噛みしつつ思った。
「よし、おチビさん。次に来た相手に言うんだぜ？　男でも女でも関係ナシ。一番最初に現れた人間に言うこと！」
普段『チビ』などと呼ばれたら悪鬼のような顔で追い掛け回すエドワードだったが、本日は非常に立場が弱かった。それもこれも三度連続で賭けに負けてしまった自分のせいだ。万が一罰ゲームを遂行できなかった場合、今夜の飲み代がすべてエドワードにつけられることになっている。軽

く三万越えしていたレシートを見てしまったあととなっては、何が何でも罰ゲームはやり遂げる必要がある。でなければ、今月一ヶ月、自由に使える小遣いがまったくなくなってしまうのだから。

エドワードは深呼吸して、改めて前を見た。

歓楽街なので人通りはそれなりにあるのだが、時間もだいぶ更けていたので二時間前の、店に入った頃よりも人波は減りつつあった。

春の陽気な空気が夜分に入って随分と下がり、薄手のティーシャツだけでは少々頼りない気がした。

深夜の街角で肺に詰め込んだ空気の冷たさに、思わず身震いをする。

「んじゃ、行ってくる」

表情を堅くして歩き始めたエドワードの背中を、その場にいた酔っ払い全員がニヤニヤと笑って見送った。

「釣れるまで帰ってくるなよ～」

最後に声をかけたのも、きっと首謀者に違いない、企み顔したエンヴィーだった。

とりあえず、歩くしかない。

向こうから獲物がこなければ、自分で探す以外にないのだ。

証拠写真を撮ってくるようにも言われている。必ず、誰かしら捕まえるまでこの罰ゲームは終わらない。

勢い良くエドワードは歩き始めたが、やや、投げやりな気分でもあった。

こうなったら誰でもいい、早く終わらせてしまおう、そんな考えしか出てこない。

ばかばかしいゲームに参加してしまったのは自分だし、財布を空にするわけにもいかないと思っている。

どうかいいカモが見つかりますように。

そんなふうに考える自分はまるで詐欺師のようだ。いや、本当にこれは詐欺行為にあたるのではないか。まったく気のない相手を捕まえ、嘘の告白をしてくる。必要なのは相手のノリとこちらの度胸、それのみだ。

ところが、エドワードは遊びに慣れていない。恋愛という事柄に、積極的になれない種類の人間だ。好きだと特定の人間をきちんと意識するのも、その相手になんとかして興味を持ってもらうのも、立派に両思いになり、心躍るデートに誘い出すことも、そのどれもが苦手だった。恥ずかしくて一歩も前に進めないのである。もうじき二十一歳の男にしては晩生すぎるとゼミの一同にからかわれ、ついにはこんな目にあう羽目になってしまった。何を言われても「どうせ俺は一生独身を通すからいいんだ」と拒否し続けてきたのに、今となっては一晩付き合ってくれそうな相手を探してこんな夜中に歓楽街をふらつく身の上だ。

いったい今夜はどんな厄日と天中殺が重なったのかと、エドワードはひたすら重くなる両足を引き摺るような心情で歩き続けた。

このまま誰にも会わずに帰ってしまいたいと、つい投げやりな気分にもなり始めている。しかしながら許されるほど金銭に余裕はない。

ようは誰でもいいのだ。だから見た目では選ばない。い

や、選んでいる場合ではない……。
非常に焦りつつビルの曲がり角まできた時、その向こうで確かに靴音を聞いた。
――誰かがやってきた。
つまりその人物が、自分のチャレンジする『一人目』ということだ。
覚悟を決めた途端、足の動きは止まった。エドワードはみるみる酔いが醒めてクリアになった頭で、足音の主を待ち構える。
唐突に角から頭が見えた。短い金髪だ。
思わずエドワードは目をぎゅっと閉じ、出会い頭に思いきり頭を下げた。
「あのっ！　よかったら今夜、俺とつきあってくれないか！」
九十度の角度でお辞儀をすると声を張り上げた。
いきなり目の前に立っていた自分に相手は酷く驚いたようで、はじめは一言も言葉を発してこなかった。
それから数十秒は経過しただろうか。優しい、少し高めの声が、いかにも困惑したように響いた。
「え。……ええと」
目線を落とした足元を確認した。
声と靴の大きさからして間違いなく男性だ。
男だろうが、女だろうが……と、エンヴィーは言っていたので、捕まえることができるならこのままぜひナンパしてしまいたい。
こんなに緊張して見知らぬ相手を誘う行為など、そうそう何度も繰り返したくはなかった。
「その、さ、三十分でも、一時間でもいいから、だから、俺と、その……お、お茶でも！」
お辞儀をした格好のまま、エドワードは手を差し出した。顔を見ないままのほうが、もし相手がどうしても嫌だと感じたならこのまま素通りできるだろうと考えたのだ。実際本当に素通りされると非常に困るが、しかし万が一目が合ってしまい、その後フラれたのではどうにも引っ込みがつかなくなる気がした。
大昔にはやった、デート相手を決めるテレビ番組のようなイメージで片手を差し出していたエドワードは、ふと、相手の笑い声を聞いたような気がした。ふふ、と、唇を緩める動きと音が、かすかに夜の空に漏れたのだ。
「いいよ。……僕でよければ」
そっと手のひらを握り返されて、反射的にエドワードは顔を上げた。
自分より頭ひとつ分は背の高い男が、かがむような格好でこちらの手を掴んでいた。
「あ……」
金色の髪と蜂蜜の溶けたような瞳の青年が、じっと真正面から見返してくる。
「どうぞ、……よろしく？　って言うべきかな？」
深い微笑みに包み込まれるような錯覚を、エドワードは感じていた。

二

「あー、ダメだ、やめやめ！」
公園のベンチに座り、思わず頭をかきむしった。
隣に腰を下ろす青年は、そんなエドワードの様子を面白そうに眺めている。
とりあえず、自己紹介をした。
俺はエドワード、このすぐそばの駅からそう遠くない大学に通っている。二十歳の学生。
相手はそれを聞いて、酷く驚いた顔をした。
僕も実はその大学に、今度通うことになったんだ。今まで海外で暮らしていたので、この土地へ来たのも実は今日が初めてで。飛行機の中ずっと眠っていたらこちらへついてどうも眠れず、興奮状態で散歩がてら、夜の街を歩いていた最中だった……と、ナンパした相手は上機嫌の笑顔で返してくれた。
「僕の名前はアルフォンス。貴方より一歳下になる。……年下は趣味じゃないなんて、今更言わないよね？」
じっと瞳を見つめながら、アルフォンスは鼓膜の奥がぞくぞくするような甘い声で囁いた。
「そんなこと……っ」
からかわれているのかそうではないのか判別できず、エドワードは白い顔を真っ赤に染めた。
もしかしたら本当に今夜だけ、この人間と恋人同士まがいのデートに発展したらどうしよう、そんな想像図が走馬灯のように脳裏を駆け巡る。
考え始めたらとまらなくなった。
というわけで、冒頭の叫び声へと戻るわけである。
「……エドさん？」
「いや、さん付けいらねぇ。エドでいい。……じゃなくって！　やっぱ俺、こういうの向いてねぇ……正直に話すから、聞いてくんねぇかな」
なんとなく歩いてたどりついた公園でふたりきり、ひそひそと会話が続く。
ノリでこなしきろうと思っていたが、アルフォンスと名乗る青年の性格の良さに、ほんの十分足らずでエドワードはノックアウトされそうになってしまった。
こんな善良を絵にかいたような人間、俺には騙せねぇ！
そう思いはじめたら、あとはズルズルと自分の中の後悔が、芋づる式に引っ張られだした。
「実は俺、友達連中と賭けをやって……負けたんだ。で、罰ゲーム中だったんだよ。……誰でもいいから一人ひっかけてこいって……証拠写真も残すようにって言われちまって、焦っておまえに声をかけた。……まさか、こんなにあっさりとおまえがＯＫしてくれると思ってなかったし……おまえみたいな人間がひっかかるとも思ってなかったし。……つまり」
ベンチに腰掛けながらずっと自分の膝ばかりを見て話していたエドワードに、ようやく青年は声をはさんだ。
「つまり、良心の呵責に耐え切れなくなったということ？」
更に身を下げつつ、下から覗き込むように目線をあわせてきたアルフォンスに、エドワードはまた赤くなった。はじめて見たときは自分より年上かと思ったが、じっと目線

を合わせると、まだどこかしら少年の面影が残されているようなところがある。
心の中をまるごと見透かされそうなほど澄んだ瞳に、晒され続けるのがどうにも辛かった。
「……ごめん」
正直に話せばもっと落ち着くと思っていた。なのに、話し終わってみてもどこかがまだひきつったように痛む。何が自分をそんな気分にさせているんだろうとエドワードは考え、一つだけ思いついた。それは、話を聞いたアルフォンスが呆気にとられ、エドワードを軽蔑してこの場から去っていくのではないかという不安感からだった。
優しそうな琥珀色の瞳が、第一印象からエドワードの胸の奥に食い込んだような気分だった。
すべてわかった上で許してくれないだろうかと、実に都合のいいことを考えてしまう自分が嫌になる。
「謝るほどのことじゃないと思うけど」
しかしあっさりとアルフォンスは言葉を返した。
「ゆ、許してくれるのか？」
予想外の柔軟さに、エドワードは目を瞬いてしまった。
こんな人のいい人間、いったいどんな環境で育つんだろう。
「許すというか。……僕を騙そうという気持ちのままでいるのが嫌だったんだよね？　それだからちゃんと全部話してくれた。それで十分でしょ」
膝の上で堅く握り締めていた拳に、アルフォンスの長い指先がそっと重なった。
「こんなに心の正直なひとの前では、いつまでも怒ってなんていられないよ。……でも」
優しい言葉にほっと胸をなでおろし、エドワードはその顔を見上げた。
「エドは僕が協力してあげないと、多分明日、困ることになるんでしょう？」
「……いや、でも、しょうがねぇし。……こんなこともう、ほかの人間に今更頼めないしさ」
歯軋りするほどのジレンマに唸ったが仕方ない。
「別にこれからほかの人間を探す必要はないんじゃない？」
隣でアルフォンスはふわりと微笑んでみせた。
「証拠写真、撮れたらいいんだよね。……それじゃ、僕の部屋へ来る？」

なんとなくそのまま手を引かれ。
たどり着いたアルフォンスのマンションは、公園からほんの数分離れた場所に建っていた。シンプルだが住み心地のよさそうな建て構えだった。
「どうぞ」
肩を押されて中へ入り、エドワードは思わず部屋のあちこちを見回した。
「女っけ、ないな」
「うん。彼女いないし。……今はね」
確信をついた質問に、本当にあっさりと答えてくるアル

フォンスを、まあ、こっちにきたばかりだからあたりまえかもなとエドワードは思った。
「エアコンつけたから、もう少しだけ我慢してね。すぐに暖まると思うんだけど」
居間のテレビの前にある脚のないソファーに腰掛けたエドワードの隣に、そう言いながらアルフォンスは座ってきた。
「何か飲む？」
肩を引き寄せるようにして抱きながら問いかけると、エドワードは首を振った。
「いや。さっき、酒たらふく飲んできたばかりだから」
「そう？　……酔いが回っちゃった？　顔、赤いね」
外と違って明るい蛍光灯の下、アルフォンスと同じソファに座っているので、今ははっきりとお互いの顔色まで見えた。
暗闇の中でさえ、アルフォンスは随分と整った顔つきをしてるんだなとエドワードは思っていたが、白色電灯の光に暴露された素顔はさらに青年の顔を際立たせていた。
（なんつー男前を拾ってきちまったんだ、俺は……）
見れば見るほど心臓の音が激しくなる、それほどの美男子だった。
「あのさ、飲み物はもういいから……」
「うん？」
「その。……写真……」
光り輝く金の瞳でこちらをじっと見つめられると、どうしようもなくうろたえた気分にさせられる。
それをごまかすように、エドワードはとりあえず初志貫徹を目標にすることにした。
「ああ、写真ね。携帯でいいんだよね、エドの」
どこ？　と聞かれ、目線で自分の胸を一瞬見ると、目の前で長い指先がエドワードの首の下あたりをするりと探った。気付いたときにはポケットから携帯電話が抜き取られてしまったその仕草は、まるでマジックでも見ているようだ。
「じゃあ、僕が撮るね。僕の動きにあわせて、適当にポーズとって」
エドワードの携帯は、被写体が映る画面をくるりと回転させ、撮影の様子を見ながら映像が撮れるようになっている。小さな画面に自分たちの姿が映る様子に、エドワードは我知らずかっと頬を染めた。
ぎゅっと肩を抱き寄せられ、頬同士はいまにもくっつきそうだ。
アルフォンスはそんなエドワードに流し目を注ぐようにしている。
「じゃあ、まずこれで一枚目」
カシャ、と、軽いデジタル音が響く。
「あ、も、もう撮ったのか？」
「うん、メディア入ってるよね？　たくさん撮って保存しておけば、一番いい画像が選びやすいから」
まったく自分たちの様子を気にせずに、アルフォンスは言った。
「はい、今度は僕の肩に、頭預けて」
「こ、こうか？」
言われるままに顔を寄せると、アルフォンスの洋服から

は清々しく甘い香水の香りがした。
「おまえ、いい匂いだな。……なんて名前、これ。オーデコロン？」
「サルビアの仲間かな、多分」
「……多分？」
「親戚がアロマテラピストなんだ。彼女のオリジナルブレンドだから、なんとなくしか分かってなくて」
「へぇー」
と一応相槌をうってはみたが、エドワードはサルビアが何であるか知らなかった。
ただ、やたらと心地良い香りが鼻腔いっぱいに広がり、すっかり回りきった酔いとの相乗効果か、なんとも言えない幸福感が支配する。
「エド」
「んー？」
「もうちょっとそれっぽい写真にしていい？」
「ん？」
耳のあたりに手が差し入れられた。
焦点を合わせようと苦労しつつ、やっとアルフォンスの顔を確認する。
どうやら自分はうとうとと居眠りしていたらしい。
「……あー。ごめん。……わかった。……どうしたらいい、俺」
「そうだね。付き合ってるって証拠写真なんだから……嬉しそうにしていればいいんじゃないかな」
アルフォンスの提案にもっともだと思ったエドワードは、とびきりの笑顔をしてみせた。

その表情に、相手が一瞬真顔になるのがわかった。
「エド、もうちょっとだけ。……くっついてもいいかな」
「ああ。別にかまわないぜ？」
頬のあたりにあったアルフォンスの手に引き寄せられたか、それともその顔が近づいていたのか、二人の目は随分と近くにあった。にもかかわらずそう尋ねられ、エドワードはほんの少しだけ、それを疑問に思った。
「ん……？」
見詰め合う視線が何かにさえぎられるのを、エドワードはまるで他人事のように感じていた。
ふれあう感触に、頭の螺子（ねじ）が緩んでいくのがわかる。
アルフォンス顔が近すぎないか？　そう尋ねてみようとして、声が思うように出せない事実に気づいた。
口が塞がっていて、声になりにくい。
「ん……、んん」
半分閉じたような目線のまま、アルフォンスの近すぎる顔をひたすら見ていた。意識から随分と離れた遠くのほうでカシャ、カシャ、と、聞きなれたデジタル音が響いている。
「ぁ、ん……っ、は、ぁ」
途中から何故か息苦しくなり、ひたすら呼吸を繰り返しているうちに、いつのまにか記憶がぷっつりと途切れていた。

三

翌日のエドワードは二日酔いで頭痛まで起こしながら、それでも必死の形相で大学へ向かっていた。
どうやって自分の家に帰り着いたのか覚えていない。
というのも記憶が飛びすぎてその経緯がまったく思い出せないのだ。
しかも。
朝家を出るときからずっと握り締め続けている携帯は、手のひらの汗で湿ってさえいた。
問題は、この中に保存されていた大量の画像データだ。
「エド、あれだけ飲んだのに早いな」
夕べの飲み会以来見ていなかったラッセルを確認したが、エドワードは無言でその横を通り過ぎようとした。当然ながらラッセルが道を遮る。
「おいおい、罰ゲームの報告がまだだろう？」
「そんな場合じゃねーんだよ」
一瞬だけ、ラッセルのほうへ睨みつけるような表情で言い返すと、相手は瞳を大きく見開いた。
「何かあったのか、あれから」
「俺のほうが聞きたい」
その答えに、いかにも聞き足りなさそうにラッセルは続けようとしたが、待てずにエドワードは歩くのを再開した。
ここまで記憶をなくす経験をしたのは、今回がはじめてだった。
酒にあまり強いほうではなかったが、それでも、どんな失態を演じても忘れるようなところまでいったことはない。
なのに夕べの記憶はもののみごとにぷっつりと切れていて、それが奇妙な焦りを生んでいた。
「なあ、アルフォンスって知らないか？」
大学で一番の情報通であるラスト女史を発見し、エドワードはさっそく声をかけてみた。
「なに、その顔色。……疲労困憊しきったって感じよ？」
「俺の顔はどうでもいい。……知らねぇのか？」
「アルフォンス？　下の名前は？」
「カーティス」
「大学にアルフォンスって名前は五人はいたと思うけど、カーティスなんて知らないわ。新入生？」
逆に聞き返され、そういえばこの町にはきたばかりだと言っていた、昨夜の会話の内容をほんの少し思い出した。
「いや、いい。すまねぇ、忘れてくれ」
「忘れてって。……ねえ、ところで昨日の……」
「罰ゲームだろ。ちゃんとやった」
「携帯で証拠、撮ってきた？」
核心を突く言葉に、一瞬我に返ったエドワードはその後、真っ赤に頬を染めた。
「んなの、本人に証言させればいいことだろ」
「本人って。同じ大学に在籍してるってこと？　エドのアバンチュールの相手」
「アバンチュールじゃねぇ！」
瞬時に否定してみたが、言われた言葉が完全にでまかせでもないという気はしていた。
「ねえ、待ってよ、エドったら」

黒髪の美女は名残惜しそうに声をかけたが、それ以上会話を伸ばしもせずに、またエドワードは早足になっていた。
とりあえずエドワードは真っ先に誰よりも早くその男、アルフォンス・カーティスを探す必要があった。
夕べ立ち寄ったマンションの場所はきちんと記憶していて、朝早くその人物の家のドアまで叩きに行った。が、生憎もうターゲットはマンションから出て行ったあとだったのだ。
「あの野郎。……アルフォンス・カーティス！！」
廊下で一言地鳴りに似た雄たけびを上げると、背後から思いがけない返事が返った。
「そういう君はエドじゃないか。……おはよう？」
振り向くと朝日に金髪を輝かせ、爽快な笑顔の青年が立っていた。
「おはよ……っ、じゃ、ねえ！」
大股走りに近づくと、相手のシャツの襟を両手で握り締めた。
しかし何を勘違いしたのか、胸に飛び込んできたエドワードを心底嬉しそうにアルフォンスはぎゅっと抱きしめた。
「朝から元気いっぱいだね。昨日は無茶させちゃったから、心配したんだけど……君はどうしても家に戻るって言ってきかないし。僕は用事があったから君が起きるまで待っていられなかったんだ」
ごめんねと耳元で囁かれ、こめかみにキスが落とされる。
「ぎゃー！」
罠にかかったウサギのように、その抱擁から逃れようと大慌てでエドワードは両手足をばたつかせたが、自分から飛び込んだアルフォンスの腕に、さらにがっしりと捕らえなおされただけだった。
「あんな写真とりやがって！　一生許さねぇからな！」
「恋人同士なら、あのくらい当然でしょ」
「いつ、誰が、どこで恋人同士になったんだよ！」
「昨日僕の家のベッドの中で。……覚えてないの？」
「いうなぁあああ」
未だ手のひらに握り締めたままだった携帯を、アルフォンスは目ざとく気づいて取り上げた。
「ああっ」
返せ、と言われる前に腕の中のエドワードの口に、恥ずかしがっちゃってと言いつつ片手で蓋をする。
唸ってる相手をよそに携帯に挿入されていたメモリーカードを開くと、夕べ撮ったばかりの画像が大量にサムネイル化されて出てきた。
「うわー、予想以上に綺麗に撮れてるね。可愛い、エド」
「んぁぁぁぁ、ぁあああ」
可愛いって言うな、と大きな手のひらに阻まれながらエドワードはまだ暴れ続けていた。
画像は二人が肩を寄せあっているところから始まり、そのくっついた部分が唇同士になり、途中から衣服が消えていた。
最後は頭上からアルフォンスが撮ったらしい。
真っ赤な顔で涙を滲ませ、何かを乞うように両手を伸ばし、正面を向いているエドワード。
雪のように白い肌にはいくつもの、赤い名残が散っている。

その画像そのままの自分の身体を確認し、起床後、エドワードは近所迷惑なことに三分間絶叫し続けた。
「俺はっ、……俺はぁっ、フリで……よかったんだぁああ！」
やっと手のひらが外れ、エドワードは涙声でアルフォンスに訴えた。
「僕は本気。いたって夕べは本気モードでした」
「世迷言をぬかしてんじゃねぇ！」
「こっちこそその台詞お返しするよ。僕の部屋へノコノコとついてきた時点でこうなるってわかりそうなものだ。……君のような可愛らしい子が、よくも今まで無事に過ごせていたほうが奇跡だよ」
「おまえ、絶対頭おかしい……！」
「とにかく僕は夕べ君が出会い頭に頭を下げて、それから手を差し出してきたあの瞬間、あのときから多分一目ぼれしてた。でなきゃ男だってわかってるのに、こんな誘いになんて乗らないよ。だって僕はもともと女の子のほうが好きだからね。……けど、君は性別を超越してた。そのくらいのインパクトがあったんだ。……ホントにもう、なんてこの肌も髪も体型も爪や指の形のひとつひとつ、声の響き具合、奥ゆかしいながらも天真爛漫な性格、どれをとっても完璧なほど僕好みなんだろう。もう絶対手放さないから。……これから、覚悟してね」
ぎゃー、うがー、とエドワードはひとしきり騒いだが、アルフォンスはまったく堪えた様子も見せず。
それどころか、赤鬼のような形相をしたエドワードの両頬に手のひらを当て、
「まったく、僕はなんて可愛い子をひろっちゃったんだろう」
大学の通路で青年は、そう言いながら早朝とは思えないほど甘い口付けをしてきたのだった。

## 四

生まれたときには自分の人生がほぼ決まっていたようなアルフォンスであった。
父はＮＡＳＡに勤めるホワイトカラー系人種。母はマリリンモンローの再来と噂されたほどの人気役者兼モデルだったが結婚を期に引退してしまった、プラチナブロンドへアー美人。
その一人息子として生を受けて十九年。
彼の記憶がある限り今日まで、そんな自分をこんな風に扱う人間は身の回りに誰一人として存在しなかった。
「アルフォンス・カーティスぅぅぅぅぅぅぅ」
その日の午後もアルフォンスは心地良いクラシック音楽を聴くかのように、愛しいひとの紡ぎだす怒号を耳に感じながらうっとりとしていた。
「やあこんにちは、僕の運命のひと」
満面の笑みで振り返ったが、ぴたりと視線が一点へ集中した。